



## はじめに

|       |                                                                                                             |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-06-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田間, 泰子, 伊田, 久美子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10466/10007">http://hdl.handle.net/10466/10007</a>                           |

## は じ め に

近年日本において「格差の拡大」が問題化されるようになってきました。その原因については、経済不況、グローバリゼーション、規制緩和、新自由主義経済等、さまざまな指摘がされています。雇用の非正規化は急激に進行し、女性雇用者の過半数が非正規雇用者です。男性についても若年層、高齢者に顕著であった非正規化はついに中高年男性を巻き込んで増加する動きを見せています。若年層のフリーター、ニート問題が注目を集め、母子家庭、高齢者、「障害」者等への援助は、その水準をいっそう低下させています。被差別部落や在日コリアン等の人権問題への取り組みは充分とは言えず、政策面では後退しつつあります。「働く」ことを基準とした福祉の再編は、弱い立場にある者の生活をいっそう過酷なものとしています。

「社会的排除」は90年代にヨーロッパで用いられるようになった新しい概念です。この概念によって貧困、不平等、教育や情報からの疎外などによって社会の様々な場面に一人前の市民として参加できず、劣悪な生存条件から逃れることが困難な層に焦点が当てられ「社会的包摂」が目指されています。格差が問題化している日本においても「社会的排除」は関心をもたれるようになってきました。しかしジェンダーの視点による議論は充分ではありません。

世界的に貧困層の7割は女性であると指摘されたのは、1995年に北京で開かれた第4回世界女性会議でのことです。最重要課題の第1にあげられたのが「貧困と女性」でした。社会的に排除されがちなのは女性だけではありませんが、現実にはその多くを女性が占めています。ジェンダーの視点なくしては、実効性のある対策も不可能であり、それゆえにジェンダー平等政策は貧困の解消にも必然的に有用であると言えるでしょう。

今期はホームレス、高齢者、母子家庭、セルフヘルプ・グループなど、具体的な課題をとりあげ、ジェンダーの視点から見えてくる「社会的排除」の新たな現実を明らかにし、共有することを目指しました。女性学連続講演会・連続セミナーに積極的に参加され、熱心に討論して下さったみなさまに、心から御礼申し上げます。

大阪府立大学女性学研究センター

田 間 泰 子

伊 田 久美子